

古代の国づくりと宮ノ脇遺跡

展示期間

令和元年11月23日（土）～12月22日（日）

宮ノ脇遺跡について

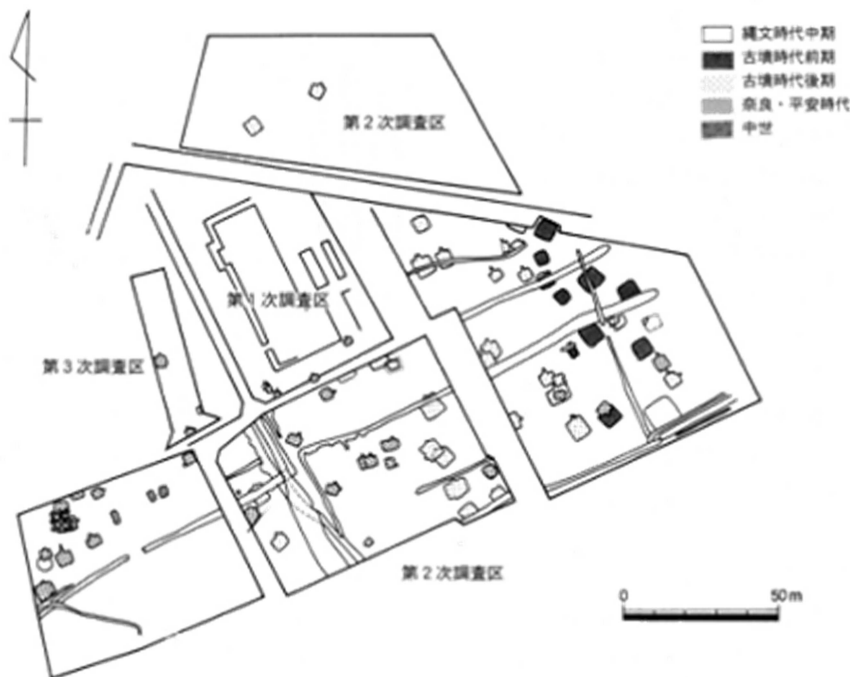
宮ノ脇遺跡は、古代の埼玉を南北に縦貫する水路である綾瀬川と元荒川の流域に位置し、市内東部の歴史を伝える大切な遺跡です。

遺跡は、江戸時代初期の流路変更以前は、綾瀬川の流路であった赤堀川に沿う低地に面した標高12mほどの低い台地に位置します。

桶川市加納地区は、昭和40年代以降に住宅開発が進む市街化区域から離れていたために、緊急発掘調査の事例が少ないところでした。

その中で宮ノ脇遺跡は、昭和58年以来、3回の発掘調査が行われ、古墳時代前期と後期、奈良時代から平安時代の集落遺跡であることが判明しました。

なかでも、奈良時代の製鉄関連遺構の発見はとくに注目されました。



古墳時代前期 14軒 古墳時代後期 32軒 奈良平安時代 31軒

綾瀬川の谷を拓く人びと

縄文時代が終わろうとしているおおよそ3000年前、関東の大河である利根川は、綾瀬川や元荒川の谷に流れこんでいたと考えられています。旧綾瀬川の谷には大量の土砂が流れこみ、川辺に暮らしていた後谷遺跡晩期の人びとの暮らしの場は3mを超える厚い粘土層で埋めつくされ、以降、川筋はアシやマコモがしげる沼が点在する湿原となっていました。

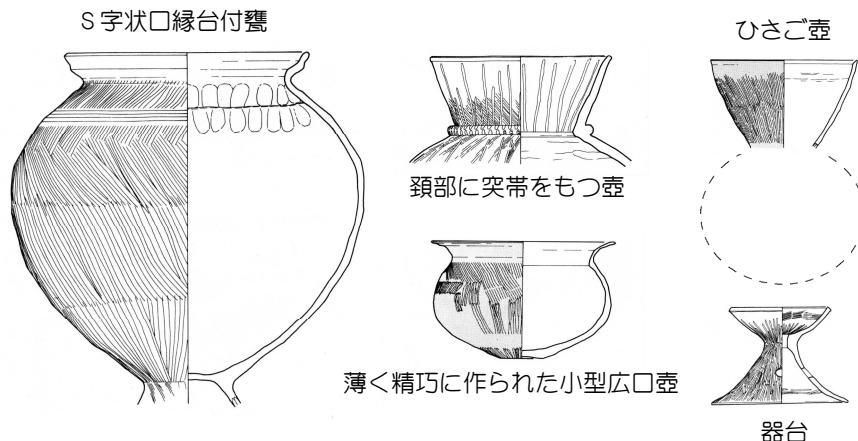
4世紀、古墳時代が始まって間もなく、綾瀬川をさかのぼって無人の湿原を耕す人びとが宮ノ脇遺跡にやってきました。

西からもたらされた「土器」

古墳時代前期の住居跡から発見された土器は、薄手の堅く焼かれたものです。

その形も、S字状口縁台付甕やひさご壺のように愛知県など東海地方西部のもの共通します。

このことから、古代の村、宮ノ脇遺跡を拓いた人びとは、東海地方につながる系譜をもっていた人びとだったと考えられます。



綾瀬川と古代の道

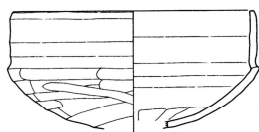
川の道である旧綾瀬川や元荒川をさかのぼると、その上流には5世紀の後半から7世紀にかけて営まれた大古墳群である埼玉古墳群にいたります。

古代の水路と宮ノ脇遺跡

宮ノ脇遺跡は、明治時代まで存在していた篠津沼の南端に面する遺跡です。この沼に沿って後谷遺跡があり、古代の水路が発見されています。水路の幅は10mほどで、川岸近くにはアシやマコモが茂っており、泥炭の中には5世紀の終わりに噴火した榛名山の火山灰（渋川噴火FA）が堆積していました。

岸辺から発見された土器は、埼玉古墳群において最初に築かれた大型前方後円墳である稲荷山古墳と同じ年代に属するものでした。

〔後谷遺跡 出土資料〕

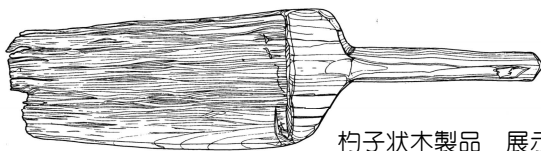


土師器坏 展示資料12

〔参考〕



土師器坏 稲荷山古墳



杓子状木製品 展示資料11



「迅速測図」（明治時代中期）に加筆

古墳時代後期の宮ノ脇遺跡とその周辺

宮ノ脇遺跡は、古墳時代後期が始まる6世紀前半から再び古代の村として営まれ、7世紀まで続きます。

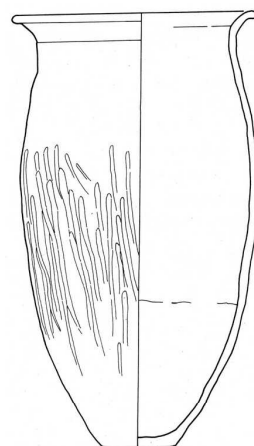
たて穴住居にはかまどが設えられ、長甕（展示資料25～27）が煮炊きに用いられました。

また、食器として用いられた坏が数多く発見されます。坏は異なる規格のものが共に出土します。

赤く塗られた坏は県南西部に広く分布し、黒褐色の坏は県北部から川の道にそって南に分布を広げています。

6世紀後半、久喜市菖蒲町下栢間に全長107mを測る大前方後円墳である天王山塚古墳が築かれます。このころ、関東地方では、前方後円墳を含む古墳の数が急増します。桶川市内でも展示資料54の円筒埴輪が出土したひさご塚古墳が築かれています。

鴻巣市の生出塚遺跡で作られた埴輪は、川の道を通して県内ばかりではなく、東京湾岸の古墳へと運ばれていきました。こうした交流が、古代武蔵国建設の基礎となっていたのです。



長甕 展示資料25



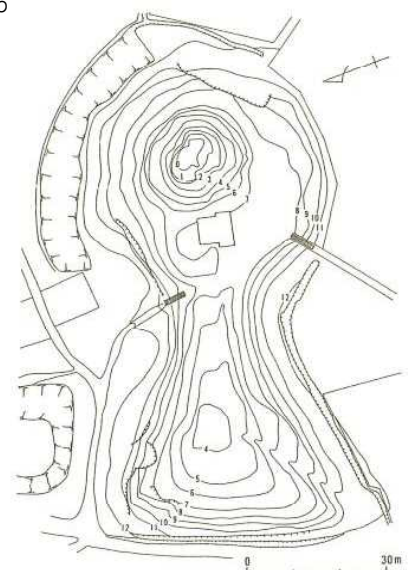
比企型坏（赤色塗彩）
展示資料18



有段口縁坏（黒色）
展示資料20



生出塚埴輪窯跡（鴻巣市教育委員会）



天王山塚等高線図（久喜市教育委員会）

鉄が拓く古代の村

古代律令国家は、藤原京に続いて、和銅3年（710）に平城京を都と定め、国作りを進めていきました。埼玉県地方は武蔵国となり、その下の郡として足立郡が生まれました。

国家の建設は大規模な地域開発を伴います。国衙と郡衙といった古代の役所が設けられ、平城京と地方の役所を結ぶ道路の建設や田地の開発が進み、国土は大きくその姿を変えていきました。

古代武蔵国において、綾瀬川及び元荒川の流域には鉄生産に関わる遺跡が集中しています。

宮ノ脇遺跡の人びとは、開発の資材として欠かせない農具や武器を生み出す役割を負っていたのです。



製鉄の村 宮ノ脇遺跡

奈良時代、宮ノ脇遺跡では、埼玉県内の同時代の遺跡に先駆けて、鉄生産が始まります。

宮ノ脇遺跡の鉄生産は、砂鉄の溶解から製鋼、そして製品を作る鍛冶と一貫した工程をもっていました。このことは、国作りを進める古代国家のもとで、地域開発の拠点として製鉄の村がおかれたことを示しています。

製鉄関連遺構は、発掘調査区の北、かつて沼地があった低地に近い位置にありました。宮ノ脇遺跡の鉄生産施設は、次の3種からなります。

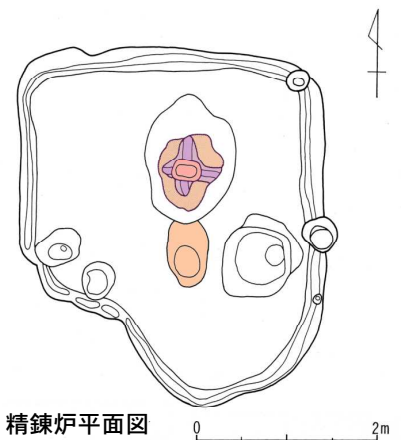
- | | |
|----------|------------|
| 製鉄炉（たたら） | 砂鉄を溶解する |
| 精錬炉（大鍛冶） | 鋼の素材を作る |
| 鍛冶炉（小鍛冶） | 鋼を鍛えて道具を作る |



製鉄炉復元図



製鉄炉断面写真



精錬炉平面図

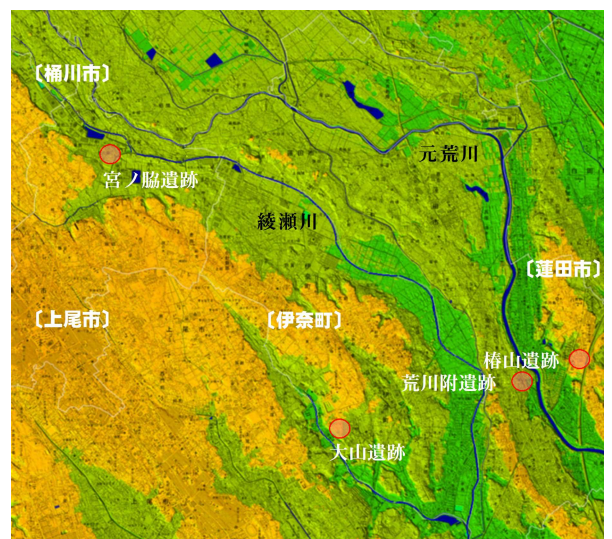
綾瀬川流域の製鉄遺跡

近年の発掘調査によって、綾瀬川と元荒川の流域には、古代の製鉄にかかわる遺跡が集中しています。

- | | | |
|-------|-----|-------------|
| 宮ノ脇遺跡 | 桶川市 | 8世紀前半 |
| 大山遺跡 | 伊奈町 | 8世紀中頃から10世紀 |
| 椿山遺跡 | 蓮田市 | 9世紀から10世紀 |

大山遺跡は、8世紀以降、継続して製鉄が行われた遺跡として知られ、製鉄炉、鍛冶工房跡、粘土採掘坑跡などが発見されています。

椿山遺跡は、平安時代の大鍛冶遺構が発見され、送風管であるフイゴの羽口が多く出土しています。荒川附遺跡は、宮ノ脇遺跡と同様に古墳時代後期から平安時代に継続する集落遺跡で、河川交通の拠点と考えられています。



綾瀬川流域の製鉄関連遺跡

■ 古代国家と村暮らし ■

飛鳥浄御原令の編纂に続いて大宝元年（701）に大宝律令が制定されました。倭国は、藤原京を都城として国号を日本と定め、公地公民の理念のもとで成文法である律令による新たな国作りを始めました。

■ 古代律令国家と足立郡

古代律令国家は、藤原京に続いて和銅3年（710）に平城京を都と定め、霊亀元年（715）に国郡郷の制度へと移行します。国と郡には、国衙（こくが）と郡衙（ぐんが）という役所が置られました。

現在の桶川市域は武蔵国足立郡に属していました。足立郡が歴史資料に現れるのは天平7年（735）です。足立郡衙の所在地は明らかになっていませんが、さいたま市桜区にある大久保領家遺跡から奈良時代の寺院の瓦が発見されており、このことから足立郡衙の所在地と推定されています。

郡司の支配下で、各郷から納められた稲は、正税（しょうぜい）として蓄えられ、都への貢納や郡を運営する基礎となっていました。税は、戸籍から作られた計帳に基づき、人びとに課せられました。律令制度のもとでは、文書すなわち文字をとおして人びとは国家の支配を受けました。

郡衙や郷の中心集落からは、木簡や硯、木簡を削る刀子などの文字を使うための道具が出土します。



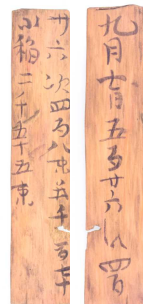
軒丸瓦 奈良時代
大久保領家遺跡出土



円面硯
熊野遺跡（深谷市）



刀子
宮ノ脇遺跡



木簡
小敷田遺跡（行田市）



富寿神宝
弘仁9年（818）
宮ノ脇遺跡



巡方（じゅんぽう）
下宿遺跡（北本市）



仏像線刻画紡錘車
下宿遺跡（北本市）

足立郡には、余戸、発度、殖田、稲直、郡家、大里の各郷があったと記録されています。

製鉄の村である宮ノ脇遺跡は、郷の中心となる集落であったと考えられ、国家が鑄造した銭（富寿神宝）や墨書土器が発見されています。

北本市の下宿遺跡では、役人の帯金具である「巡方」や牛甘（うしかい）の文字と仏像を刻んだ石製紡錘車が発見され、古代足立郡における重要な集落であったことを物語っています。

■ 宮ノ脇遺跡の暮らし



鉄鎌（曲刀鎌）

鉄製紡錘車



鉄鎌

宮ノ脇遺跡のたて穴住居跡からは、平安時代の生活を物語る鉄製品が出土しています。

大型の鉄鎌は国から割り当てられた口分田に実る稲を刈り取り、鉄製の紡錘車は麻糸を紡いで税として納める布を織ることに用いられたのでしょう。

鉄鎌（やじり）は、軍団の兵士となり、西国の防人や奥羽の鎮兵として動員される人びとの姿を思い起こさせます。

■ その後の宮ノ脇遺跡

律令国家のもとで製鉄の村として始まった宮ノ脇遺跡は、9世紀の後半から衰え、律令による政治が行き詰まったという10世紀には途絶えてしまいます。

鎌倉時代にあたる13世紀に、遺跡の中に武士の居館と思われる遺構が現れます。堀に囲まれた遺構からは、中国の北宋時代の銭や、中世の陶磁器が発見されています。



祥符通宝 北宋（1008）